

マーク・トウェインとジョナサン・スウィフト 『ガリヴァ旅行記』から 『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』へ

和 栗 了

マーク・トウェイン(Mark Twain)は十八世紀イギリス文学の影響を強く受けていた。シャーウッド・カミングス(Sherwood Cummings)は、トウェインの西部の通信員時代の記事には十八世紀のイギリス文学の影響が見られると指摘している。¹ 一八六〇年代のトウェインは理神論の影響を強く受け、明解で分かりやすい文章を書いたという。カミングスの主張する通り、トウェインの文体は当時の西部文学を代表するアーティマス・フォード(Artemus Ward)やジョシュ・ビリングス(Josh Billings)とは違う。² さらに、パスカル・コヴィイキ(Pascal Covici, jr.)は、トウェインと先輩西部文学者たちとの質的な違いを指摘して、“Mark Twain’s fictional world is different from that of his immediate regional predecessors because it is organized around a real, and not a contrived, discrepancy between reality and appearance.”と述べている。³

また、ヘンリー・ウォナム(Henry Wonham)は、ダニエル・デフォー(Daniel Defoe)やジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift)のような諷刺的腹話術をベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)が最初に学びとり、そのもとでワシントン・アーヴィング(Washington Irving)やトウェインが活躍するようになったと主張する。⁴ いずれの研究者も十八世紀イギリス文学がトウェインに影響したことを重要視している。

それで、本論ではトウェインが終生読み続けた『ガリヴァ旅行記』(*Travels into Several Remote Nations of the World by Lemuel Guilliver*, 1726)をおもに取り上げながら、トウェインが十八世紀イギリス文学をどのように吸収し、

独自に発展させようとしたかを論ずる。

1

マーク・トウェインは終生スウィフトを愛読し続けた。トウェインの書いたもので、スウィフトに関する記述は一八五四年二月十八日付のマスカタイン『ジャーナル』(Muscatine, *Journal*)紙宛の通信文がおそらく最初だろう。トウェインはペンシルヴァニアの家並みが綺麗に並んでいないと述べ、“They [houses] look as though they might have been emptied out of a sack by some Brobdignagian gentleman, and when falling, been scattered abroad by the winds”と、たとえている。⁵ 当時トウェインは十八歳。十七歳で家を飛び出してから、ニューヨーク、フィラデルフィア、ペンシルヴァニア、ワシントンと、植字工をしながら各地を転々とし、兄のオリオン(Orion Clemens)が編集する新聞に通信文を書いた。これだけでは、いつごろトウェインが『ガリヴァ旅行記』を読んだのかははっきりしない。けれども、トウェインの初期通信文の中には著名な文学作品への言及がほとんど見られないことを考えると、ここでの『ガリヴァ旅行記』への言及は注目に値する。⁶

『苦難を忍びて』(*Roughing It*, 1872)では、中西部からネヴァダへ移動する語り手が巨人のように描かれている：

Often, on lazy afternoons in the mountains, I have lain on the ground with my face under a sage-bush, and entertained myself with fancying that the gnats among its foliage were lilliputian birds, and that the ants marching and countermarching about its base were lilliputian flocks and herds, and myself some vast loafer from Brobdingnag waiting to catch a little citizen and eat him.⁷

さきの通信文でも、この『苦難を忍びて』でも、トウェインは巨人と小人と

の対比に注目していることを付け加えておく。

結婚する以前も、トゥエインは『ガリヴァ旅行記』が好きであった。結婚以前、トゥエインは婚約者オリヴィア(Olivia L. Langdon)に二つの文学作品を読まないようにと忠告する。その一つはセルバンテスの『ドン・キホーテ』(*Don Quixote de la Mancha*, 1605, 1615)、もう一つは『ガリヴァ旅行記』である。

ところで、トゥエインという人物は、自分がよく知っているものを作品の題材に取り上げ、揶揄し、批判することが多かった。トゥエインは十代の頃にウォルター・スコット(Walter Scott)やフランクリンを愛読した。十八歳の時トゥエインは、フィラデルフィアにあるフランクリンの墓まで見物する。彼はこれらの作家たちをよく知っていたがゆえに、後に批判的になる。最終的にトゥエインは自分という人間を最もよく知っていた、それで自分を含めた人間に対して批判的になる、とも言える。

極論はさておき、結婚以前に二人が交した手紙の中で、読書あるいは文学作品に関する部分はそれ自体面白い。というのも文学的な領域で名声を得つつあったトゥエインが、十歳以上も年下の東部育ちの女性に、どの作品を読むべきか助言しているのだから。助言するということは、トゥエインは『ドン・キホーテ』と『ガリヴァ旅行記』をよく知っていたことになる。それだけでなく、これらの作品に対して何か特別な意見を持っていたと考えられる。

話をスウィフトに戻すと、トゥエインは、死の直前までスウィフトに関心を持ち続けていた。コリー・テイラー(Coley B. Taylor)という人物がいた。この人物は、トゥエインが一九〇八年にコネチカット州レディング(Redding)に移り住んだことでトゥエインと接触が生まれる。このテイラーは一八九九年生まれで、トゥエインと特に親しかったわけではない。それでも一冊の本を上梓する。それは *Mark Twain's Margins on Thackeray's "Swift"* という本である。⁸ これは題名の通り、サッカレー(William Makepeace Thackeray)がスウィフトについて行なった講演記録にトゥエインが書き込みをしたものが中心である。ついでに、テイラーの思い出と多少のコメントが付け加えられている。この本は、トゥエインが晩年にいたるまでスウィフトに関心を持ち続けていた

ことを示すだけでなく、トウェインとスウィフトが、そしてたぶんサッカレーも、共通の特質を具えた作家達であることを、図らずも暗示している。

トウェインとスウィフトはかなり似た性質を持っていたようだ。あるいは、スウィフトのトウェインへの影響は非常に強烈だったと言うべきかも知れない。『ガリヴァ旅行記』に限定しながら話を進める。トウェインがオリヴィアに『ガリヴァ旅行記』を読むなどと言った理由は何であろうか。まず考えられるのは、『ガリヴァ旅行記』の性的場面であろう。『ガリヴァ旅行記』の性表現は十九世紀のアメリカ東部の育ちの良い未婚の女性が読むにはふさわしくない、とトウェインは考えたのだろう。スウィフトは猥褻だと非難されるくらい、『ガリヴァ旅行記』ではセクシュアルな描写が繰り返される。一つだけ例を挙げる。巨人の国で王妃に使える女性達がガリヴァを弄ぶ場面がある：

The Maids of Honor often invited *Glumdalclitch* to their Apartments, and desired she would bring me along with her, on Purpose to have the Pleasure of seeing and touching me. They would often strip me naked from Top to Toe, and lay me at full Length in their Bosoms; wherewith I was much disgusted; because, to say the Truth, a very offensive Smell came from their Skins; which I do not mention or intend to the Disadvantage of those excellent Ladies, for whom I have all Manner of Respect:

(*Gulliver*, 95)⁹

なかでも若くてきれいな十六歳の女官はガリヴァを自分の乳首に跨がらせるといふ悪戯をしたと付け加えられている。

卑猥だから読むなどトウェインがオリヴィアに忠告したとしたら、少し納得できない。というのもトウェイン自身かなり卑猥と受け取られるような面をオリヴィアに見せていたと考えられるからだ。トウェインの性的欲望は二人だけの間で婚約ができあがった頃の手紙に見られる。一八六八年十二月四日付のオリヴィア宛の手紙で、トウェインは “If I could only take you to my arms now, &

imprint upon your forehead the kiss of reverent Honor, & upon your lips the kiss of Love, imperishable & undefiled!” と書く。¹⁰ さらに、同じ手紙で “our projected & expected engagement was not yet consummated” とも言うのだ。¹¹ トウェインは “consummate” という単語に「初夜の性交により結婚を完成させる」という意味があることを知っていたはずだ。彼はどのような行為をもって婚約を “consummate” するというのか。

オリヴィアとの文通が始まる三週間前、トウェインは西部時代からの旧友のフランク・フラー (Frank Fuller) に、コンドームを送ってくれるよう手紙で依頼した：

Speaking of “courses,” I have mine, now. Please forward one dozen Odorless Rubber Cundrums — I don’t mind them being odorless — I can supply the odor myself. I would like to have your picture on them.¹²

トウェインはこれをどのような目的で使うつもりだったのか。このような手紙を読むと、嗅覚についてトウェインとスウィフトはかなり違うが、二人は性的表現に、あるいは性的な話題に、消極的でなかった点で同じだ。

『ガリヴァ旅行記』が小説でありながら旅行記の体裁をなしていることもトウェインにとって大きな意味があった。スウィフトが旅行記のようなフィクションが存在することを示した以上、自分も旅行記と虚構の合成作品を著わしてもよいだろう、とトウェインは考えたのではないか。誰も『ガリヴァ旅行記』が事実を記録したものとは考えない。一方で、ベイヤード・テイラー (Bayard Taylor) の『黄金郷』 (*Eldorado*) やジョン・ロス・ブラウン (John Ross Browne) の『ユーゼフ』 (*Yusef*)、あるいは『アパッチ国の冒険』 (*Adventures in Apache Country*)、ダン・デイ・クワイル (Dan De Quille) の『大当たり』 (*The Big Bonanza*) などの旅行記は基本的に事実の報告である。これに対して、トウェインの旅行記は事実に対するものの見方を提示する。このことを如実に示しているのがそれぞれの作品のイラストである。¹³ トウェイン以外の作者の旅

行記のイラストは語り手本人が描かれることはほとんどない。これに対して『赤ゲット外遊記』(*Innocents Abroad*, 1869)や『苦難を忍びて』では、お馴染みの髭を生やした男トウェインの姿が頻繁に登場する。つまり、トウェインの旅行記は珍しい体験やぞっとする事実を提供するだけではない。トウェインというペルソナが事実か虚構か判然としない旅行体験を語るところに彼の旅行記の面白さがある。『ガリヴァ旅行記』が旅行記の体裁のフィクションであるとき、トウェインもフィクションのような旅行記が読者に受けると考えたはずだ。いずれにせよ単なる事実の報告を中心とした旅行記を拒否した点に、トウェインと先輩西部作家との質的違いがあった。これがコヴィッキの主張する質的な相違といえよう。

トウェインがスウィフトからかなり多くのものを吸収したことは明らかなが、十八世紀イギリス文学とトウェインという大きな視点も、スウィフトとトウェインとを考える上で重要だ。十八世紀のイギリス文学を概括することはかなり困難な作業だが、いくつかの特徴は挙げられる。一つは、主人公がストレンジャーであり、その主人公に冒険と試練が与えられる作品が多い。『ガリヴァ旅行記』だけでなく、『ロビンソン・クルーソー』(*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*, 1719)もストレンジャーの冒険物語である。そしてストレンジャーの成長の問題が絡まってくると、氏(nature)か育ち(nurture)かという、トウェインの読者にはお馴染みのテーマになる。ヘンリー・フィールディング(Henry Fielding)の『トム・ジョーンズ』(*The History of Tom Jones, a Foundling*, 1749)は、十八世紀に氏か育ちかという問題を扱った典型的な作品である。ストレンジャーがピカロ(picaro)であり、その冒険ということになれば、セルバンテスとトバイアス・スモレット(Tobias Smollett)が登場する。スモレットといえば、トウェインはスモレットの『原子の物語と冒険』(*The History and Adventures of an Atom*, 1769)に着想を得て、『細菌ハックの冒険』("3000 Years Among the Microbes")を執筆したのだろう。¹⁴あるいは、主人公の相対的な体の大きさが変化するという主題は、『ガリヴァ旅行記』にも使われている通り、十八世紀イギリス文学のトポスであったとい

える。体の異常に大きなストレンジャーと極端に小さなストレンジャーの登場である。後述するが、主人公の相対的大きさの変化はトウェインの文学の中心的な課題となる。この点でもトウェインは十八世紀イギリス文学の影響を受けていたのだ。

もう一つの特徴はいわゆる小説の技法が確立していなかったことである。小説の技法の確立、旅行記の独立、小説ジャンルの細分化などは、やはり十九世紀後半の出来事だ。旅行記的な作品にのみ限定して言えば、先に述べたとおり、『ガリヴァ旅行記』は旅行記のようなフィクションであった。ローレンス・スターンの『感傷旅行』(*A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick*, 1768)は、珍しい事物の記録というより、語り手と登場人物たちとの心の旅として読むのが一般的なようだ。『ロビンソン・クルーソー』は冒険旅行記の体裁の小説であった。ついでに言えば、スモレットも四一通の手紙からなる『フランス・イタリア旅行記』(*Travels through France and Italy*, 1766)を書いた。十八世紀の英国ではかなり自由な形式の旅行記が書かれていたのである。そしてトウェインは、十八世紀にはかなり自由な形式の旅行記が書かれていたことを知っていたに違いない。少なくとも『ガリヴァ旅行記』と『ロビンソン・クルーソー』が彼の愛読書であったことは事実だ。

話が大きくなったので、トウェインが十八世紀イギリス文学の伝統にかなり影響されたとだけ主張して、『ガリヴァ旅行記』に戻る。

2

『ガリヴァ旅行記』と言われてトウェインの読者がまず念頭に浮かぶのは『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』であろう。この二つの作品の類似点はいくつも指摘できる。語り手がストレンジャーであること、ガリヴァもハंकも常に銃器を携えていること、訪問した国々には科学技術と呼べるものがないこと、語り手の性格が一貫していないこと、動物が重要な意味を持っていること、ついでにどちらの主人公も裸にされていること、等々が挙げられる。

まず、ガリヴァにとってもハンクにとっても銃器は大きな意味があった。リリパットの国でも、プロブディンナグの国でも、ガリヴァは身を守る手段としての銃を手放さない。銃を所持していることと、銃がどのようなものを人々に知られないことが、彼の身を守ることに直結している。そしてラピュタの国でもフーイヌムの国でも火器が登場しないのは意図的だ。この二つの国は西洋近代文明の所産を、それぞれ全く別のやり方で拒否している。だからこそ近代的武器としての銃は問題にされないのだ。また、ガリヴァにとって銃が如何に大切であったかは、ロビンソン・クルーソーが銃と弾薬をいたって慎重に管理していたことを思い出すとよい。彼にとって銃は獲物を取るためと身を守るために、必要不可欠の道具であった。

ハンクにとって銃は六世紀の人々、特に貴族を屈服させる道具となる。ハンクと銃との関係は白人によるネイティブ・アメリカンに対する抑圧という点から見ることができる。ハンク・モーガンと言われて、ルイス・モルガン(Lewis Morgan)のことを連想する読者もいるだろう。彼は、ネイティブ・アメリカンの研究者としてだけでなく、社会進化論的視点から文化の発展段階について論じた『古代社会』(*Ancient Society*, 1877)の著者として名高い。ルイス・モルガンはネイティブ・アメリカンの社会の近代化に尽くし、彼らから絶大な信頼と尊敬を得た。だが、彼の著書にはネイティブ・アメリカンの心の動きは読み取れない。¹⁵ 彼の著書は、ネイティブ・アメリカンの生活習慣や日常の道具、基本的な考え方などを詳しく教えてくれる。だが、固有名詞を持つ人物の心理はどこにも描かれていない。著者とネイティブ・アメリカンの人々とがどのように精神的に触れ合ったのか、あるいは反発しあったのか、どこにも著わされていない。もちろん、そのような類の著書ではないという前提はあるにしても、彼の著書はあまりに事件がなさ過ぎる。白人とネイティブ・アメリカンとの間に何もわだかまりが無いかのように書かれている。そしてそれゆえに、トウェインの読者にとってルイス・モルガンの著書は信じがたい。言い換えれば、ルイス・モルガンのネイティブ・アメリカンに関する著作は、ネイティブ・アメリカンの側に限りなく近づいた白人の観察記録なのであって、西部の珍奇な事

物を記録した旅行記とほとんど同じ視点しか持っていない。彼の本には観察する者の葛藤も語られていないし、読む側が考えさせられることもない。

ところで、トウェインは、個人と個人との間に存在する、乗り越えがたいわだかまりを描いた。ハックとジムとの間には埋めることのできない溝が最後まであった。ルイジとアンジェロは下半身がつながっているがゆえに、わだかまりは明確なコントラストとして表現されている。『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』では、ハンクと六世紀の人々との間には、やはり十分な相互理解は成立していない。

ハンクは埋められない違いをガトリング機関銃と高圧電線で解決しようとする。上に述べたように、この作品を白人によるネイティブ・アメリカン抑圧の歴史と読むならば、ハンクの銃器は無理解と偏見とあきらめの象徴である。ハックの父親を矯正する手段は銃しかないと結論付けた無能な判事とハンクとの間に大差は無い。銃器に関してみる限り、スウィフトよりもトウェインのほうが悲観的な人間観を持っているといえる。

次に、二つの作品の主人公が裸にされる点も興味深い。性的な問題に関心が強かった点でスウィフトとトウェインは同じだが、その表現には程度の差がある。程度の差ではあるが、実は大きな問題であった。スウィフトは『ガリヴァ旅行記』でかなりの直接的に性的描写を行っていた。これに対して、トウェインは私信の中で、しかも控えめにしか表現していない。『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』では、ハンクとサンディが性的関係を持っていた。ところが、トウェインはその関係の始まりを、ドミニク・アングルの『泉』を連想させる挿絵と、ハンクとサンディとが一頭の馬に跨って騎士の遍歴の旅に出る挿絵によってしか表現しない。¹⁶ スウィフトのように、火事を消すのに小水をかけたとか、ガリヴァのズボンの破れ目からのぞいている下半身を小人たちは見上げた、というようにはトウェインは書きにくかった。

トウェインが書きにくかった理由は、十九世紀後半のお上品な伝統やアメリカン・ヴィクトリアニズムと呼ばれる支配的雰囲気があったのだろうが、妻オリヴィアの影響も考えられる。あるいは、本の売り上げで豪華な生活を維持す

る職業的物書きとしては、卑猥だと批判されるような表現は避けねばならなかったはずだ。いずれにせよトウェインのほうかはるかに窮屈な雰囲気の中でのを書かねばならなかった。

主人公の相対的大きさの変化は十八世紀英国文学のトポスであり、トウェインの生涯にわたるモチーフのひとつであった、と先に述べた。この主題は、巨大なものと微小なものとが一瞬にして立場を入れ替える逆転の構図とも密接に絡まっている。『ガリヴァ旅行記』も『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』も主人公の相対的大きさが変化し、これと併せて様々のものが逆転する。リリパットの国でガリヴァの体は原住民の数十倍の大きさになり、この国の政治や外交がいかに浅薄であるかが語られる。逆にブローブディグナグの国では彼は十センチ程度の小人になり、この国の王から次のように結論付けられる：

But, by what I have gathered from your own Relation, and the Answers I have with much Pains wringed and extorted from you; I cannot but conclude the Bulk of your Natives, to be the most pernicious Race of little odious Vermin that Nature ever suffered to crawl upon the Surface of the Earth.

(*Gulliver*, 108)

ここでスウィフトの使う“vermin”という単語はトウェインも人間に関して何度も使ってきた言葉であった。例えば、「インドでは牛と“vermin”とが泥でできた家に住んでいる」と『赤道に沿って』(*Following the Equator*, 1897)で報告されている。¹⁷人間は虫けらにしか過ぎない、という人間不信はスウィフトのものであり、トウェインも同様の考えを持っていたことが判る。そしてこの不信の延長線上に、人間と動物との逆転が生ずる。スウィフトによれば、フーイヌムの国では人間と馬との立場が逆転する。馬の方が人間よりも知性も徳性もはるかに優れているという証拠を、人間としてのガリヴァが見せつけられる。

いと小さき者といと大きな者とが一瞬にして立場を逆転させるモチーフは、

那須頼雅氏も指摘しているとおおり、トウェインが繰り返し用いてきたものだ。¹⁸ ハンクは合衆国にいたときには図体もあまり大きくない成り上がりの工場長であった。そして彼を殴り倒したのはヘラクレスのような人物であったことを思い出すべきだ。ところが六世紀の世界では彼は巨人と見なされ、騎士が遍歴の旅で出会う怪物と勘違いされている。彼自身も自分は動物の中で最大の象だと主張することからも、ハンクが六世紀では大きく見えたことが分かる。『ガリヴァ旅行記』の中からトウェインが好んで引用した部分は、巨人と小人との対峙の場面であったことは示唆的である。

『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』でも逆転が起こる。ハンクは、リリパットの国のガリヴァと同じように、ほとんどが自分より体の小さい六世紀の人々を見下している。ところがハンクはアーサー王の王としての威厳のある姿を発見し、狼狽する。最後には人民の解放者を自認するハンクが最悪の虐殺者になるという大逆転を演ずる。しかも彼は自分の大失敗を自慢話のように語るのだ。

このような価値観や立場の逆転に直面して、主人公は途方に暮れてしまう。トウェインもスウィフトもストレンジャーと逆転とを用いて既成概念に揺さぶりをかけ、真実とは何かを問いかけようとする。だが、その過程で語り手は一貫性を失い、自己崩壊をきたしてしまう。渡邊孔二氏によると、「[ロビンソン・] クルーソーは旅をとおして個人主義的経済人としての自分を確立した。それに対してガリヴァは旅をとおして自らの精神を破壊していく。あたかもオデュッセウスのように、旅の試練をくぐり抜けた結末として無残な敗北者の姿を現出させている」のである。¹⁹ イギリスに戻ったガリヴァは人間不信に陥り、日常生活に戻れない。同じようにハンクも十九世紀末のロンドンで半ば狂人と思われている。そして、極めて皮肉なことだが、彼が何よりも賞賛したはずのアメリカ合衆国にハンクは戻らないのである。

野獣の状態にある人間をあるべき人間にするのだと盲信しているのがハンクだとしたら、トウェインは『ガリヴァ旅行記』の続編を書いたと読める。ガリヴァは、人間がヤフーという獣だと気づいた。人間嫌いに陥りながらもガリヴァ

アは“to instruct the Yahoos of my own Family as far as I shall find them docile Animals” (*Gulliver*, 259)と希望を抱こうとする。しかしガリヴァは希望的意志を表明するだけで終わってしまうのだ。一方、ハंकは進化論やら社会進化説、ルイス・モルガンの理論などで武装して、六世紀の人間よりも二十世紀の人間のほうがあるべき人間により近いのだ、だから自分が六世紀の獣達を人間にするのだと息巻く。そして蒸気機関車、電話、新聞、広告、ダイナマイト、電気、機関銃、といったものによって近代化を推し進める。ハंकは近代化イコール人間化であり、進歩だと信じて疑わない。ハंकのこのような論理の飛躍がアメリカ的特性であるかどうかは別として、あるべき人間を創るという命題に取り組んだ点でトウェインはスウィフトの後継者であり、『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』は『トム・ジョーンズ』や『フランケンシュタイン』(*Frankenstein, or the Modern Prometheus*, 1818)と共通の問題、即ち人間の再創造という問題を抱えていたのである。

3

これまで述べてきたように、トウェインは『ガリヴァ旅行記』から多くの着想を得たことは明らかであり、同時にスウィフトとは異なる問題をトウェインが扱わねばならなかったことも明白だ。しかしながら、トウェインが『ガリヴァ旅行記』をどれだけ手本にしても、トウェインとスウィフトとは異なる。もっとも際立つ相違点はそれぞれの主人公の異文化に接する態度、特に他の国の言語に対する許容性である。

『ガリヴァ旅行記』と『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』との一つの大きな違いは、ガリヴァが流された国々はいずれも全く未知の国々であるのに対して、ハंकはアメリカ人にとってもかなり馴染みぶかいアーサー王の国を体験したことである。スウィフトは共時的に存在する架空の国々を通してイギリスやフランスやアイルランドの白人の国を、さらにはアメリカ先住民のことも視野に入れて、描こうとした。全く未知で、奇妙な、しかし身近な国とい

うオクスイモロンを使ったのだ。一方のトウェインは白人のアメリカ人にとって伝説的英雄のアーサー王を登場させる。これにより未知ではなく既知の世界の体験となる。さらにその世界の人々が自分たちの祖先に違いない時、進歩や近代化という理念が問題となる。

未知の国を体験するガリヴァは、迷い込んだ世界に対して偏見も先入観も抱いていない。これに加えて、彼が巨人と小人双方の人間に対して見せる好意的態度や善意から判断すると、ガリヴァは悪意というものをまったく持っていないかのように読める。ガリヴァが悪意が無いように見えるのは、彼の流れ着いた国がいずれも未知の国だったからだ。リリパットの国についてもフウイヌムの国についても、ガリヴァは予備知識を持っていなかった。全く未知の文化との接触に先入観の入る余地は無く、ガリヴァは、少なくとも始めは、観察者になっている。

観察者としてのガリヴァの姿、言い換えればガリヴァとハンクの本質的な違いは、語り手と言語との関係によって表現されている。まず、ガリヴァは卓越した言語能力を持ち、どの国でもその国の言語を短期間のうちに習得する。リリパットの国では“ I had now made a good Progress in understanding and speaking their Language.” (*Gulliver*, 21)と語られ、プロブディンナグの国では“ I answered as loud as I could in several Languages” (*Gulliver*, 68)と、ガリヴァは語学運用能力の優秀さを示している。しかも、ガリヴァは中国語も理解している。そして、フウイヌムの国では、馬のいななきに近い言語まで習得しようと、“ I boldly pronounced Yahoo in a loud Voice, imitating, at the same time, as near as I could, the Neighing of a Horse” (*Gulliver*, 196)と試みる。

このようなガリヴァの言語能力と努力は、ガリヴァがそれぞれの国に受け入れられる過程で最も重要な要因になっている。リリパットの国では彼が言語を理解できたがゆえに、理性的な生き物だとわかり、縄を解かれるのだ。プロブディンナグの国でも、ガリヴァを発見した農夫は、ガリヴァが言葉を話すので彼を理性的な小人だと認識するのである。

言語を使用することは理性に基づく行為であり、言語を使用することが人間

としての証拠だという考えが『ガリヴァ旅行記』の根底にある。この作品で繰り返し使われる“rational,” “Reason,” “Sense”といった単語が十八世紀の人間像を伝えている。ある一定の言語能力と分析力のある人物が、冷静にかつ合理的に相手の言語を聞き取れば、どのような言語圏でも人間同士の相互理解は可能だという考えである。逆に、それが可能なものを人間とみなすという人間観だ。

だからといってスウィフトは人間を礼賛はしない。むしろどのような国にも無知から生ずる偏見や、些細なことから生ずる反目をスウィフトは見抜いている。ラピュタの国の人々が没頭する似非科学に対するスウィフトの視線は厳しい。リリパットの国とブレフスキュの国との戦争の原因が卵の食べ方だと語られると、読者はスウィフトの批判に共感してしまう。そしてスウィフトによる人間批判の一つの結論がガリヴァによるヤフー観察であるとすれば、スウィフトは人間嫌いだと言える。付け加えておくと、ガリヴァはヤフーと言葉を交わしていない。言い換えれば、ヤフーは理性的存在、つまり人間ではないのだ。

未知の国に流れ着いたガリヴァに対して、ある程度知っている六世紀のアーサー王の国に迷い込んだハンクは、独善的だ。ガリヴァが卓越した言語習得能力によって、それぞれの国の人々と相互に意思を疎通したのに対して、ハンクは新聞を発行するという愚行を行う。しかもその新聞は誤字や脱字が多い。それでもハンクは“Of course it was good enough journalism for a beginning” (Yankee, 259)と独り善がりなことを言う。²⁰ 最後には自らに対して反旗を翻した騎士たちに向かって降伏するよう文書で勧告する。貴族階級でさえ文字が読めないことをハンクは分かっていない。このようなハンクの理想主義的独善を見透かすように、クラレンスは“He laughed the sarcastic laugh he was born with” (Yankee, 434)と笑うのだ。

ハンクの唱える近代化、民主化は、新聞発行という文字の押し付けに象徴されるように、押し付けなのである。六世紀のほとんどの民衆は文字が読めない。一部の司祭を除いて支配階級も文字を使わない。ハンクの行った文明化とは、文字を読めない人がほとんどの社会に文字文化を押しつけることであり、それ

を通して獣を人間にしようというのだ。さらに、六世紀の人々を教化するという信念、民主主義体制、科学技術と呼ぶものを傲慢に押しつけている。この傲慢さ、厚顔無恥こそ世紀転換期のアメリカ合衆国の人々が持つようになった特質だ、とトウェインは主張していると解釈できる。

ところで、トウェインは文字に対する不信感を繰り返し表現してきた。『金メッキ時代』(*The Gilded Age*, 1873)では、実の父親に関する手がかりを記した手紙をローラ(Laura)は最後に暖炉で燃やす。『ハックルベリーフィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885)では、ハックは逃亡奴隷ジムの居場所を書いた手紙を破り捨てて、“I’ll go to hell”と言うのだ。²¹ ハンクの手稿は“it was a palimpsest. Under the old dim writing of the Yankee historian appeared traces of a penmanship which was older and dimmer still-Latin words and sentences: fragments from old monkish legends, evidently” (*Yankee*, 7)だと語られる時、読者はテキストを信じてよいのか迷ってしまう。付け加えると、クラレンスはハンクのページ(“page”)であり、ハンクが“you ain’t more than a paragraph” (*Yankee*, 15)と冗談を飛ばした相手であった。明らかにトウェインは文字になったものに対して不信感を抱いていた。

トウェインは、話し言葉あるいは声には信頼を寄せていた。『ヨーロッパ放浪記』(*A Tramp Abroad*, 1880)の二章から三章にかけて、アオカケス(“blue Jay”)についての話が挿入されている。この話はジム・ベイカー(Jim Baker)が辺境の奥地でアオカケスの言語を聞き取れるようになった次第をベイカー自身が語るほら話だ。話し言葉あるいは声という観点から見ると、本来言葉を持たない筈の動物が話すのを聞いた点が重要だ。さらに、『ハックルベリーフィンの冒険』で、神の摂理に全て任せると自然と口から言葉が出てくることをハックは発見する。²² 神の摂理と自分の言葉が直接に結びついた一瞬である。ハックはこの時、声にならない声を代弁するのだ。

アオカケスの挿話が何を伝えようとするのかは別の機会に譲る。ただ、この話は声にならない声をジム・ベイカーは聞き取ったと主張し、語る。聴衆と読者は、このほら話の根底にあるものを看取できるか、挑戦されているのだ。つ

まり、トウェインが信頼する声あるいは話し言葉は、通常聞こえてくる音や言葉の背後にあるものなのだ。

スウィフトは人間の根源的な理性を信じていた。少なくとも人間の言語体系そのものに不信は抱いていない。あるいは、理性ある存在としての人間は言葉を使うとガリヴァは信じている。ところがトウェインは文字に不信感を持っている。少なくとも言葉は誤解されることを、作家になった頃からトウェインは問題にしてきた。物を書くことで生きる者にとって、文字への不信は致命的なパラドックスである。講演家としても成功したトウェインは話し言葉の限界も痛感していたはずである。言語体系そのものに対する疑念を表明している点で、スウィフトよりトウェインのほうが悲観的だと言える。

より悲観的であることがより深い人間観察につながるとは限らない。従ってトウェインのほうが偉大な文人だったと主張するつもりは毛頭ない。ただトウェインのほうが配慮しなければならない社会的事情が多かった。そしてトウェインのほうがはるかに多くの聴衆に語り掛けねばならなかったし、多くの本を売らなければならなかった。意図したことが伝わらないという経験も当然多かったはずだ。

言葉への不信は、人間に対する不信につながる。この不信は理性を持つものとしての人間と理性を持たないものとしての動物との相違という問題に直結する。ガリヴァは動物としてのヤフーとは言葉を交わさない。スウィフトの時代には人間と動物の境界線は明確だったのだ。これに対して、トウェインは人間と動物が意思を疎通させる物語を書いた。言葉と文字を使って六世紀の獣のような人々を人間にするのがハंकの目指したものであった。しかし文字も話し言葉も真意を十分に伝えるものではないし、背後にあるものは伝わりにくい。言葉が不十分なものでしかないとき、言葉によって人間を規定するのは難しくなる。人間が人間であるためにはどのような条件が必要なのか、トウェインは言葉そのものから疑いだしたのだ。

1 カミングスは次のように主張している。

It can be argued that Twain's newly minted styles was more classical than modern. Certainly, his impeccable grammar and syntax and his rich and precisely managed vocabulary were as different as possible from the calculated illiteracies of an Artemus Ward or Josh Billings. He was, moreover, fond of using rhetorical devices more in evidence in the eighteenth century than in his own-parallelism, antithesis, and numerous qualifiers.

Sherwood Cummings, *Mark Twain and Science: The Adventures of a Mind* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1989), 48.

2 例えば、ジョシュ・ビリングスの『氷上のジョシュ・ビリングス』の冒頭部分は、次のように特殊な文体で始まる。

Having herd mutch sed about skating parks, and the grate amount ov helth and muscle they woz imparting tew the present generashun at a slite advance from fust cost, I bought a ticket and went within the fense.

I found the ice in a slippery condishun, covering about 5 akers ov artyfishall water, which waz owned by a stock company, and froze tew order.

Henry Wheeler Shaw, *Josh Billings on Ice, and Other Things* (1868. New York: AMS Press, 1972), 11.

3 Pascal Covici, jr., *Mark Twain's Humor: The Image of a World* (Dallas, Texas: Southern Methodist University Press, 1962), 14. さらに Covici はこの著書で次のようにも述べている。

The satire of "The Man That Corrupted Hadleyburg" is Swiftian in its bite; we are in the presence of an attitude similar to that expressed by the King of Brobdingnag when he confesses that he "cannot but conclude the bulk of your natives to be the most pernicious race of little odious vermin that nature ever suffered to crawl upon the surface of the earth." As we shall see, not even in *The Mysterious Stranger* does Twain abide by so final

a statement of black despair; even when he approaches it, as he does here, the hoax, without evoking laughter but still suggesting latent humor, raises a dimension of meaning, a quality of insight, that leaves a reader almost optimistic about the human species: men may at times be vile, but man can understand man.

4 Henry B. Wonham は次のように述べている:

The satirical ventriloquism of Swift's *Modest Proposal* had been practiced in England at least since the appearance of Defoe's shocking pamphlet *The Shortest Way with the Dissenters* (1702), but no one in the mother country expected this kind of wit from an American.... Franklin alone among Revolutionary satirists had learned from Britain's most skillful dissenters how to manipulate an audience by voicing its prejudices ironically and with a straight face. As Lewis Leary explains, it was "under ranklin's aegis" that "the ventriloquist writer invaded the new world," speaking for the first time "from behind a pseudonymous mask, as Washington Irving and Samuel Clemens would speak."

Henry B. Wonham, *Mark Twain and the Art of the Tall Tale* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1993), 4-5.

5 Mark Twain, *Mark Twain's Letters, Vol. 1* (Berkeley, California: California University Press, 1988), 40.

6 トウエインが書いた初期の通信文については、Mark Twain, *Mark Twain's Letters, Vol. 1* (Berkeley, California: University of California Press, 1988)の1ページから57ページまでを参照。

7 Mark Twain, *Roughing It* (Berkeley, California: University of California Press, 1993), 14.

8 Coley B. Taylor, *Mark Twain's Margins on Thackeray's "Swift"* (New York: Haskell House Publishers, 1975).

9 Jonathan Swift, *The Writings of Jonathan Swift* (New York: Norton &

Company, 1973). 以後、このテキストからの引用は、本文中の括弧内に、*Gulliver* と略記し、ページ番号をあわせて記す。

- 10 Mark Twain, *Mark Twain's Letters, Vol. 2* (Berkeley, California: University of California Press, 1990), 304-5.
- 11 Mark Twain, *Mark Twain's Letters, Vol. 2* (Berkeley, California: University of California Press, 1990), 307.
- 12 Mark Twain, *Mark Twain's Letters, Vol. 2* (Berkeley, California: University of California Press, 1990), 240.
- 13 彼らの作品のイラストとトウェインの旅行記のイラストを比べると、トウェインの旅行記にはトウェイン自身が描かれている例が圧倒的に多い。

Bayard Taylor, *Eldorado or Adventures in the Path of Empire* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1988)、John Ross Browne, *Yusef or The Journey of the Frangi* (New York: Arno Press, 1977)、*Adventures in Apache Country* (New York: Arno Press, 1973)、Dan De Quille, *The Big Bonanza* (Las Vegas: Nevada Publications, 1974)を参照。

- 14 スモレットは『ドン・キホーテ』の英語訳を1755年に出版している。トウェインは、Thomas Sheltonの英訳(1620)を読んでいたのか、Peter Anthony Motteux訳(1712)か、C. Jervas訳(1742)か、あるいはスモレット訳か、どれを読んでいたのか、判然としない。いずれの翻訳を読んでいたにせよ、『ドン・キホーテ』がトウェインの愛読書のひとつであったことは間違いない。
- 15 Lewis Henry Morgan, *Ancient Society* (Arizona: University of Arizona Press, 1985)、Lewis Henry Morgan, *League of the Iroquois* (New Jersey: A Citadel Book Press, 1996)、Lewis Henry Morgan, *The Indian Journals, 1859-62* (New York: Dover Publications, 1993)参照。なお、Elisabeth Tooker, *Lewis H. Morgan on Iroquois Material Culture* (Tucson, Arizona: University of Arizona Press, 1994)も参考にした。
- 16 ドミニク・アングルの『泉』とサンディがハンクに水をかれる場面のイラ

ストは、極めてよく似ている。アングルの絵画は裸婦像であり、ハンクが水浴する時にサンディも裸になったと考えてもよいだろう。何ととってもアングルの絵は官能的な絵なのだから。

また、ハンクとサンディが一頭の馬に乗って遍歴に出発することも性的だ。フロイトはこの部分から夢判断のヒントを得たのではないかと勘ぐりたくなる。

- 17 Mark Twain, *Following the Equator*, vol.2 (1897. Tokyo: Hon-no-Tomo-sha, 1988), 139-40.
- 18 那須頼雅「マーク・トウェインと“いともちいさきもの”」、『タバード』(神戸:神戸女子大学英文学会, 第10号, 1995), 119-136.
- 19 渡邊孔二『メービウスの帯』(京都:山口書店, 1991)、82頁。
- 20 Mark Twain, *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (Berkeley, California: University of California Press, 1984). 以後、このテキストからの引用は、本文中の括弧内に、*Yankee* と略記し、ページ番号をあわせて記す。
- 21 Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (California: University of California Press, 1985), 271.
- 22 Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (California: University of California Press, 1985), 277.